

「平成27年度全国学力・学習状況調査」の結果について

江戸川区立一之江第二小学校

調査日：平成27年4月21日（火）

対象学年：第6学年 実施人数：134名

※ 算数A・国語Aは主として「知識」に関する問題。算数・国語Bは主として「活用」に関する問題。本年度は、理科が調査対象に加わった。

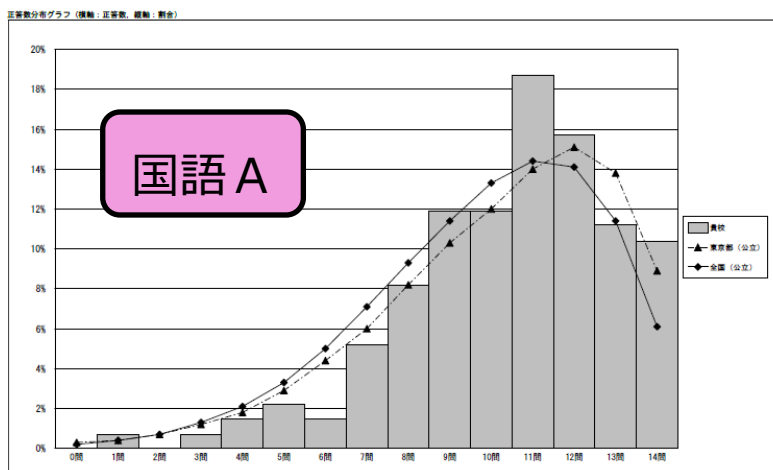
《結果》

平均正答率	国語A	国語B	算数A	算数B	理科
全国	70.0	65.4	75.2	45.0	60.8
東京都	72.3	66.5	77.4	47.8	62.4
本校	74.5	70.9	79.2	47.8	63.7

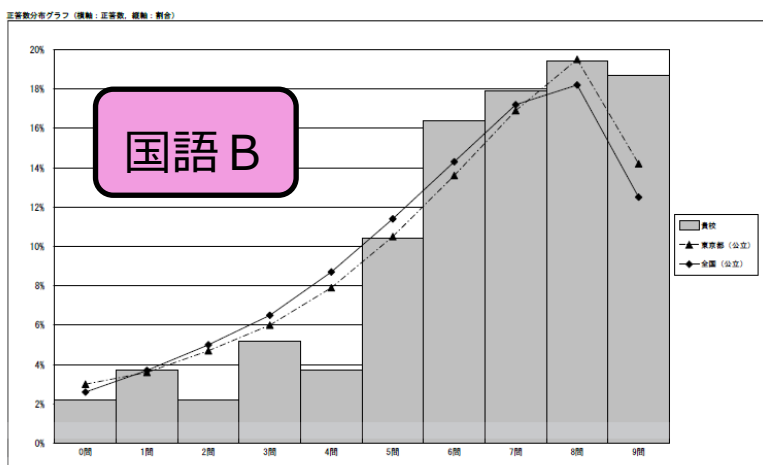
分析

- 中央値（11問）またはそれ以上に人数分布が多く集まっている。全体として基本的な知識は、全国や都と比較して高水準にある。
- 漢字の問題において本校児童正答率100%を達成した問題があった。
- 文章の中の主述の関係を捉える問題の正答率が低かった。

正答数分布グラフ



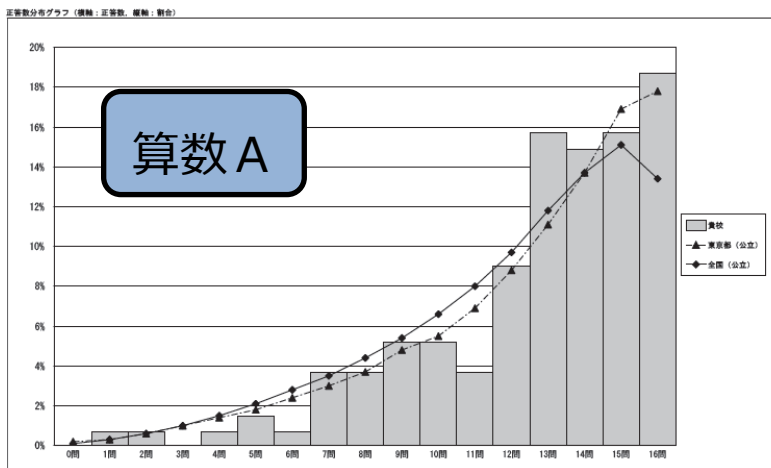
- 全国や都と比較して、上位の分布が多く、全問正解となる9問の達成率が著しく高い。一方で、0~1問の割合も一定数ある。
- 個別の設定問においても、すべての項目で、本校の正答率が全国や都の平均を上回った。



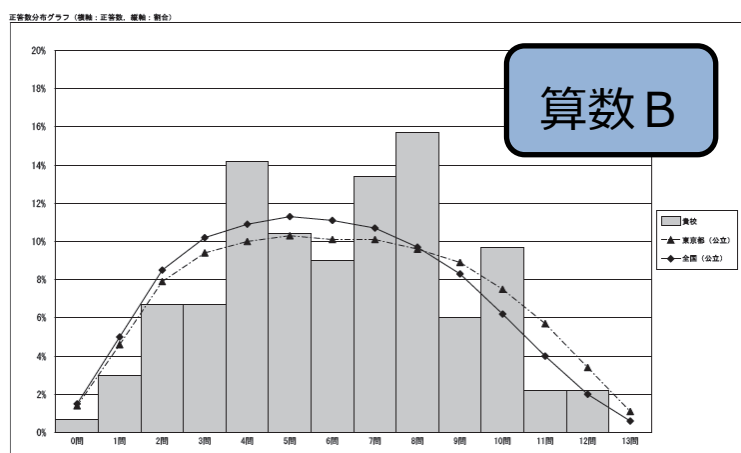
《考察》

○国語では、漢字の強化週間を設け、定期的にテストを行い、児童にも目標をもって取り組ませている。今後も本校の特色の一つとして継続していく。また、普段の授業での新聞やパンフレット作りといった言語活動や、自身の考えを短い文章にまとめる学習を行ってきたことが、国語Bの活用力を高める一端となったと考える。児童の中には、長い文章に対して、問題を解く前に諦めてしまうなど苦手意識をもつ児童も少なくない。江戸川区での取り組みである読書科などとも関連させながら、個別の指導も丁寧に行っていく。

- 中央値（13問）に人数分布が多く集まっている。全問正解の人数が19%近くに達した。
- 基礎的な計算問題は高い正答率であったが、単純な計算ミスによる失点も見られた。
- 都の平均を下回った問題が、角度や図形の分野に集中していた。

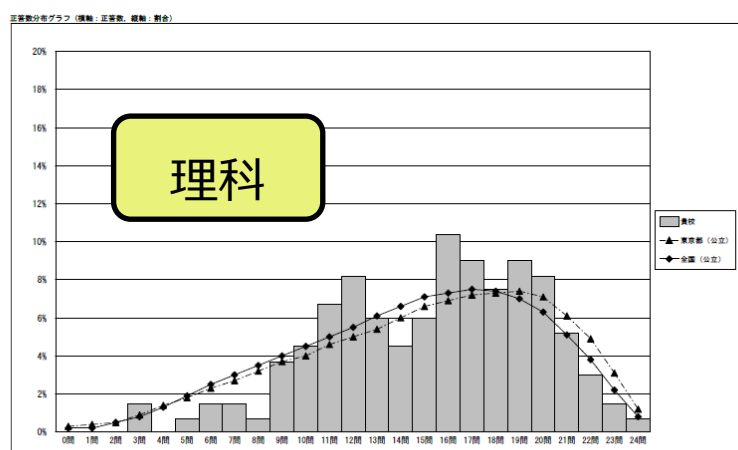


- 分布図に、中央値（6問）をはさんで二極化が見られる。
- 算数Bにおいても、図形の分野の正答率が低い。特に記述式の理由を書く問題では、全国や都の平均を下回った。
- 割合を求める問題において、著しくポイントが低いものがあった。



○算数では、A・Bともに児童が「角度」「図形」の分野が苦手であることがわかったので、今後の指導に反映させていく。計算問題での数値が高く安定していたのは、「学習タイム」で行っている「東京ベーシックドリル」での基礎基本の反復練習の成果が出始めたためと考える。このベーシックドリルでは、個人の苦手な分野が分かるため、今後も継続して活用し、全体としてもさらなるレベルアップを目指す。

- 中央値（16問）よりやや上位に分布が集まったが、中下位層との二極化が見られる。
- 正答数の低かった問題は、分野が特定されていなかったが、記述問題で、説明内容が不十分なため得点に結びつかないパターンが多かった。



○理科では、正答につながる知識を有していたり、理解はしていたりするものの、その答えの根拠となる理由を記述する際に、説明不足により失点となる児童が多かった。普段の授業で実験や観察をする際に、自分の考えをしっかりと書き、考察していく学習を、丁寧に行いたい。

今回の調査では、すべての教科において、本校が全国や都の平均以上の正答率を上回った。児童の努力や本校の取り組みの一定の成果と捉え、今後も指導を継続していくと共に、課題点は指導計画に反映させていく。